不思議な訣れ

昭島市　佐藤光子（東城町二丁目出身）

「水のいのち」という合唱曲は、高野先生が高田で書いた詩であり、よく歌われている「蓮の花」という曲ももちろんです。ところが、高田近辺に合唱団が幾つもあっても、そのことが知られていないようで、歌われてもいない様子。とても残念に思われるのです。私はあの合唱団（混声合唱団コーロ・ソフィア）を高田に一度招いて、それらの曲を聴いてもらいたい。「蓮の花コンサート」とでも名づけて、実現したいと思っているのです。

（大変大掛かりになりますので、市を挙げてのことになり、Jネット役員の方にも、文化協会にも、上越タイムスにも、その意向は話してあります。）

その話を指揮者鈴木茂明氏の奥様にチラッとしましたところ、「喜んで。是非。けれど、あの曲は聴く人はもちろん感動しますが、歌う方がもっとずっと感動します。高田で、聴いていただくのではなく、皆さんとご一緒に歌いたいですね。」「でも、突然では、無理ですよね。」「いいえ、合唱団の方は楽譜が読めるのですから、事前に主人が数回指揮をしに行って、一緒に練習して歌えば、大丈夫ですよ」と。

以前、私は上野の東京文化会館の大ホールで、「光の輪」の八つの合唱団員600人が壇上で「水のいのち」の大合唱をしたのを聴いて、鳥肌が立ったのです。大勢なら大勢なだけ、素晴らしくなる合唱です。高田近辺の合唱団が一堂に会して、鈴木氏の指導でコンサートが開けたら――、そして高田にその歌をしっかり根づかせる――というのが、私の夢なのです。

「佐藤はそんな夢を描いている」と感じながら拙著「水澄めり」を読んで頂ければ幸いです。（高野先生は、敬語表現を嫌われ、いつも「彼・高野」と書くようにと指示されましたので、文中は常体で書いています）

＊　＊　＊　＊

拙著の前半は、私の俳句三十五句を詩人の高野喜久雄が鑑賞し、後半は高野と中学生の時に出会い、約半世紀の空白を経て再会し、彼が死去するまでの交流を描いたエッセイです。

佐渡出身の高野は、一九四八年から十四年間高田農業高校の数学教師でした。

ものを書き散らしていた十四歳の私に、既に詩人として活躍していた高野は、「あなたには物を書く資質がある」と言ったのでした。「詩人」のその言葉に、私は有頂天になりました。

ハイデガーを耽読し、人間存在の意味を問い続ける彼の詩は、哲学的でメタファーを駆使し、大変難解で、「私の詩を本当に理解してくれたのは、鮎川信夫と高田三郎の二人だけだろう」と彼自身言っていたくらいです。六月に亡くなった宗左近氏は、「高野の詩はノーベル賞級」と評価し、彼の詩をよく引用しました。けれど、高野の貌い批評などは日本の詩壇からは理解されなかったようです。彼は詩作を男子一生の仕事とは思わなくなり、「真なるもの求める事こそ、この世に生まれてきての、生きることの意味ではないか」と、専門の数学に没頭し、一九八二年に「円周率の公式」を発見しました。二〇〇二年、東大の金田教授のグループによって主計算に用いられ、一兆二千四百十一億桁の世界記録を打ちたてたのです。これにより「高野公式」が認知され、それまでシュテルマーの公式だった数学史は塗り替えられて、高野喜久雄の名前が刻まれたのです。

一方、彼の詩が作曲家高田三郎氏の目に留まり、五編の詩から「水のいのち」という合唱組曲が生まれました。詩と曲の素晴らしい融合により、合唱曲として最大のヒットとなり、「日本の第九」といわれるまでになって歌われています。その歌詞が伊語に訳され、イタリアに紹介されると、「日本にこんな詩人がいるとは！」とイタリアの詩壇は驚き、彼の話を聴きたいと、何度もイタリアに招聘しました。

それを機に、三十年ほどのブランクを

経て、彼は再び詩を書き始めました。去年の秋には、イタリアで国際文学賞の最高賞と、国際詩人賞を受賞しました。彼の宗教的哲学的な詩は、西洋人の肌に合ったのでしょう。東洋人で最も身近な詩人として、受け容れられたのです。

日本の詩人といえば、ヨーロッパでは高野が挙げられるようです。9・11の事件の後、ある団体が世界の主な詩人や哲学者に平和へのコメントを求め、日本では高野に。彼は詩で応え、ご子息明彦氏（東大大学院教授）が英訳し、他の人たちの言葉と共に銅版に刻まれて、各国を回っているとのことです。

そのような実績を積んで逝った彼でしたが、実像は、気位が高く、農業高校の教師時代の生徒への接し方は、冷たくて厳しかったために、懐かしく思い出される教師ではなかったようです。

教壇での彼を知らず、七十歳過ぎのシャイな彼に再会した私には、信じられないことなのですが。

合唱曲「水のいのち」は、「合唱する人たちには憧れの曲。聴く人も歌う人も感動して涙が出る」といわれている名曲です。生徒に敬遠されていた彼に、どうしてそのような詩が書けたのだろうか――。「天才」と言われる彼は、彼自身、どうすることも出来ない欠けたものがあることを自覚していたからではないか。その自覚があったからこそ、見えない翼　一途な翼　ある限り　のぼれ　のぼれ　のぼりゆけ　のぼりゆけ」と終章で繰り返し、人間のあり方、理想の姿を歌い上げている――。「水のいのち」は、自分の切なる願いをこそ詩に託したので、人の心を打つものになっているのではないか。

そのため、晩年には、彼が少し変わることが出来たのではないか、と分析すると納得できるのです。

あと一つ、彼の逝去後ずっと考えていることがあるのです。

「藤沢の病院へは、五月二十八日の火曜日に行きます」。四月三十日の彼からのメールに予約した日が書かれていました。「二十八日、ご一緒致しましょうか。――え、二十八日は日曜日ですけれど」と、その夜返信しました。

彼は物置の片づけをしていて腰を痛め、コルセットをして通院していたのです。奥様を三年前に亡くされ、鎌倉で独り暮らしでした。

いつもは直ぐに返事があるのに、翌日の昼になっても返信がありません。一日の夕方、目にちの確認のために電話をしてみたのです。

「父は今朝、食道静脈瘤破裂で亡くなりました。通夜や葬儀は身内だけでします。その打ち合わせをしているところです。今、お電話を頂いたのも、ご縁です。父が大変お世話になりましたので、お骨を拾っていただけないでしょうか」と、明彦氏。言葉もありませんでした。

後日「お別れの会」を開くので、身内以外は彼の親友三好十郎研究家の田中里之氏と私だけがお骨を拾ったのでした。まるで私にお骨を拾うようにというサインのような、最期のメールでした。

以前、私が彼のことを書いた文を、「美化されて書いてあって恥ずかしい」と言い、その後書かせなかった。

今年に入って、「その人にしか書けないものを書くのがエッセイです。あなたとの出会いからのことを、書いておくといいね」と、今までの彼では考えられないことを、突然言ったのです。しかも、初校に目を通し、「良く纏めたね」と満足そうでした。

内容を確かめたうえで、完成も見ずに突然の逝去でした。

高野先生、人は死ぬ時、予感があるのでしょうか。

黄泉に咲く夾竹桃は白ですか

光子

高野喜久雄先生

新風舎刊
電話：０３－５７７５－５０４０
定価：９４５円（税込み）